

## マタイによる福音書16章「弟子としての道」

### 1A パリサイ派とサドカイ派の教え 1-12

1B 時の徴 1-4

2B パン種への用心 5-12

### 2A イエス・キリストの告白 13-20

1B イエスの正体 13-17

2B 教会に与えられた権威 18-20

### 3A 自分を捨てる道 21-28

1B 人の思い 21-23

2B 命を救う者 24-28

## 本文

マタイによる福音書 16 章を開いてください。ついに私たちは、福音書における中核になる部分に入ります。これまで、弟子たちと共に時間を過ごされていたイエス様が、弟子たちに「わたしを、あなたがたは誰だと思うか。」と尋ねられ、「神の子キリストです」と告白しました。そして、このようにご自身のことを明かされた後で、十字架に行く道を教え始められます。そして福音書の中で、初めて「教会」についてイエス様が言及しておられる箇所です。教会とは何ぞや、ということも私たちは、はっきりと知ることができます。

### 1A パリサイ派とサドカイ派の教え 1-12

前回の学びを思い出してください、15 章ですがイエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖の東、デカポリス地方にいました。そこで四千人に給食を与え、それから 39 節ですが、「イエスは群衆を解散させてから舟に乗り、マガダン地方に行かれた。」とあります。マグダラの地方です。ガリラヤ湖の西にあり、ガリラヤ地方から湖畔地域に入る、入口のところにある町です。ですから、イエス様と弟子たちはしばらく、ユダヤ人の住んでいる地域から離れ、ツロやシドンなど異邦人の多くいるところに行っていたのですが、今、再びユダヤ人のいるところに戻ってきました。

### 1B 時の徴 1-4

1 パリサイ人たちやサドカイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天からのしるしを見せてほしいと求めた。

15 章の初めに、パリサイ人たちと律法学者たちが、手の洗いの儀式を弟子たちがしていないということで咎めましたが、彼らはわざわざエルサレムからやってきています。宗教の権威者として、そんなことをしてはいけないと批判するためにやってきました。ここでも同じで、公の代表者らがイ

エスのところに来て、挑みかかっています。ただし、いつものパリサイ派だけでなく、サドカイ派もここにいます。実はこれは初めてではなく、バプテスマのヨハネがバプテスマをヨルダン川で授けていた時に、「大勢のパリサイ人やサドカイ人が、バプテスマを受けに来る(3:2)」と書いています。サドカイ派とパリサイ派はその考え方や神学について、大きく違いますし、影響力にも差がありません。サドカイ派は、神殿礼拝を守る祭司たちが入っていた宗派でありローマに対して政治的な力を持っていました。大祭司カヤパはサドカイ派です。けれどもパリサイ派は、民衆の間にも教師として受け入れられていて、ユダヤ人の中では最も定着していた人々です。けれども、相反する宗派が一緒に来ているのは、どちらにしても彼らの立場が危くなるほどの脅威をイエス様に対して抱いていたということです。

その内容は、「天からのしるし」です。これまでイエス様が行われていた奇跡、癒しや悪霊追い出しなど、預言者が御国の現われとしてそのようなことをメシアが行われると預言していたものです。あまりにも明らかな、イエスがメシアであることの証拠だったのですが、これらを彼らは「ベルゼブルの力によって行なったのだ」として、サタンの方で行なったとしてあしらったのです。それらは、地上のもの、いや、地の下から来たものであり、あなたが天から、神から来たというなら、天からの徴を見せなさいと言います。確かに、預言には天における徴があります。イエス様が十字架に付けられている時に、正午なのに天が真っ暗になりました。それでも彼らが信じなかったことを思い出してください。彼らの問題は神学や聖書理解ではなかったのです。心の問題でした。

2 イエスは彼らに答えられた。「夕方になると、あなたがたは『夕焼けだから晴れる』と言い、3 朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」こうしてイエスは彼らを残して去って行かれた。

イエス様は、決して宗教指導者らのような難しい話に気を逸らされる方ではありませんでした。天の徴と彼らが言うから、イエス様は、今日の天気みたいな、誰でもわかるような話に持って来て、彼らの知的な高ぶりを砕かれます。

そして、「時のしるしを見分けることはできない」と言われるのです。聖書には、時のしるしについて預言者がかなり多くのことを話していました。その代表的なのがダニエルです。彼の預言には、「一時、二時、半時」というような言葉、七十週が定められているというような言葉があります。そして、いつかメシアが来られ、けれどもメシアが断たれたら、荒らす憎むべき者が出て来るという預言も行ないました。その他、多くの預言者が「時」を語りました。この「時」というのは、必ずしも時間としての時だけではありません。「機会」と言ってもよいでしょう。何かをする機会が増えてきたということです。例えば、収穫の時と言えば、今こそ、非常に作物が熟れているので、収穫をする時だ

ということですね。けれども、彼らは全くそういったことには無頓着で、時のしるしを見失っているとイエス様は言われているのです。私たちも霊的に鈍くされているのであれば、主が何かを行われているのにその時を見失うことがあるのです。

そしてイエス様は、「悪い、姦淫の時代」と言われました。これは強烈な糾弾です。姦淫の時代とは、アッシリアに捕え移された北イスラエル、そしてバビロンに捕え移された南ユダに対して、まことの神ではなく偶像礼拝を行っていたことを、霊的にそう呼んでいました。その霊的な背信のために彼らは外国の勢力に捕え移されました。バビロンから帰還後、ユダヤ人たちは確かに、偶像を取り除きました。もはや、偶像礼拝はしないと決めていました。確かに、木や石で造られたものはなくなったのですが、その自己保身の背後にある心の頑なさ、目に見えない偶像礼拝に匹敵するとイエス様は見えていたのです。そして、この約四十年後、一つ世代が過ぎようとする時、紀元七十年に、外国の勢力であるローマによって捕え移されてしまうのです。

最後に、「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」とされていますが、これは以前、イエス様が言われたとおり、三日目に墓からよみがえるという徴です。これが最後の徴であって、これを拒むのであれば本当に希望はありません。イエスが死者の中から甦られたということが、他のあらゆる奇跡にまさって、イエスを自分の救い主、主として信じるに値する徴であります。

## 2B パン種への用心 5-12

5 さて、向こう岸に渡ったとき、弟子たちはパンを持って来るのを忘れてしまっていた。

イエスの一行は、ユダヤ人の集落に行ったばかりだったのに、今のパリサイ人とサドカイ人の出来事があったために、再び退かれました。ここは再び、ガリラヤ湖の東岸です。これまで何度となく、イエス様が退かれたことを思い出してください。初めは、政治的な理由でした。ヘロデ・アンティパスがバプテスマのヨハネを斬首したことを聞いて、それで自分だけで寂しい所に退かれました。これから、ご自身が彼と同じようになることを思って、父なる神と時間を過ごしたいと思ったのでしょうか。それから、パリサイ人や律法学者が、弟子たちが手を洗っていないとして非難した後のことです。これは宗教的、霊的な理由と言ってよいでしょう。この時にイエス様と弟子たちは、「ツロとシドンの地方に退かれた(15:21)」とあります。そして、ここで再び退かれています。これで最期になります、イエス様は十字架への道を、この最後の退きによってはっきり進んでいけます。

そうとも知らず、弟子たちは自分たちがパンを持ってくるのを忘れているのに気づきました。

6 イエスは彼らに言われた。「パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心しなさい。」<sup>7</sup>すると彼らは「私たちがパンを持って来なかったからだ」と言って、自分たちの間で議論を始めた。

ちょっと滑稽に見える会話です。イエス様が今、出会ったパリサイ人とサドカイ人との確執について、弟子たちに気をつけるようにと注意喚起を与えているのに、弟子たちは、自分たちがパンを持ってこなかったことなのだとして議論しているのです。このような言葉のずれは、他の時にも起こっていました。なぜ、イエス様が霊的なことを教えておられるのに、こうやって物理的なことだと早合点したのでしょうか？次をご覧ください。

8 イエスはそれに気がついて言われた。「信仰の薄い人たち。パンがないからだなどと、なぜ論じ合っているのですか。9 まだ分からないのですか。五つのパンを五千人に分けて何かご集めたか、覚えていないのですか。(十二籠ですね。)10 七つのパンを四千人に分けて何かご集めたか、覚えていないのですか。(七籠です。)11 わたしが言ったのはパンのことではないと、どうして分からないのですか。パリサイ人たちとサドカイ人たちのパン種に用心しなさい。」

信仰の薄さをイエス様は、原因として言われました。これまでに、イエス様は何度となく、食べ物が必要について事欠くことがないように備えてくださった奇跡を行われました。パンを持ってくるのを忘れたというだけで、そんな咎めたりするような話になっていること自体が、イエス様を見つめていない信仰の薄さの表れです。信仰がないと言っているのではなく、信仰が薄いのです。信仰は持っています、イエス様が必要を満たしてくださる方であることを知っています。けれども、具体的な事柄について、自分たちが目撃したイエス様の真実について適用できないのです。

ずっと前ですが、知人がこんなことを話してくれました。アメリカに旅行に行った時に、ニューヨークの地下鉄に乗る時に、「危険ではないのかどうか？」と乗ろうとしている人たちに聞いて行ったとのこと。皆がにこりと笑っていたそうなのですが、毎日利用している人々に聞いてみて、どうするのか？というところでしょうね。けれども、その知人もニューヨークに住んでその地下鉄を利用して、それで毎日、それを体験していくうちに、「ああ安全なのだ」と体得していくでしょう。こういったことを、イエス様はずっと弟子たちに行なっておられました。弟子たちが、イエス様は頼りがいのある方なのだということを体得していったはずでした。ところが、彼らが具体的な必要になるとすっかり忘れてしまったのです。

12 そのとき彼らは、用心するようにとイエスが言われたのはパン種ではなく、パリサイ人たちやサドカイ人たちの教えであることを悟った。

パリサイ派やサドカイ派の教えを、「パン種」とイエス様は言われています。先にイエス様が使われた譬えの中に、パン種がありました。「天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉の中に混ぜると、全体がふくらみます。(13:33)」そう、パン種というのはパンを膨らますためのイースト菌のことです。ヨーグルト菌でも同じことをしますが、既に出来上がっているパン種の入った粉のごく一部を次の粉のために取っておきます。その種入りのパンの粉が僅か

であっても、粉に混ぜると全体に膨らみます。そして再び、僅かにその一部を残して、次の粉に混ぜると全体が膨らみます。パリサイ派やサドカイ派の教えを受け入れてしまうと、少しだけで終わることなく、全体に広がってしまうので細心の注意を払いなさいというのが、イエス様の意図だったのです。

弟子たちにとって、パリサイ派やサドカイ派の教えは権威そのものです。サドカイ派はエルサレムの神殿においては彼らこそが管轄している者たちであり、パリサイ派はそれこそがユダヤ教の標準として一般社会に受け入れられていました。だから、イエス様の教えに従っていても、彼らから何か言われたら、少しでも正しいのではないか？と思ってしまうのです。けれども、それが命取りなのです。その教えそのものが間違っているというよりも、彼らから結ばれている実が、“やばい”からです。イエス様に対する完全な不信仰です。あれだけの徴を見ながら、それらをサタンの仕業とみなし、天からの徴を求めるといふ、修復不能なぐらいの不信仰です。

私たちは、このことに気をつけないといけません。イエス様について行っているけれども、世の中でみなを受け入れているような考えや価値観、それを少しぐらいなら取り入れてもいいだろうとおもったら、パン種になります。パン種について使徒パウロが、コリントの教会に対して話していましたが(1コリント 5:6)、コリントの教会には信者が霊的に未熟で、世的な考えが入り込んでいました。それで大混乱になったのですが、信者と不信者は調和できないことを話しています。

## 2A イエス・キリストの告白 13-20

### 1B イエスの正体 13-17

13 さて、ピリポ・カイサリアの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っていますか」とお尋ねになった。

イエスの一行は、ガリラヤ湖の東岸におられました。そこから一気に北上しました。そして、異邦人の住む深い領域に行きました。それは、ピリポ・カイサリアと呼ばれる所です。そこは、ギリシアの神々を祭っているところで、「パン」という神が拝まれていて、その礼拝が行われていました。そこから「パニマス」と呼ばれます。ヨルダン川の源流の一つになっているヘルモン山の麓にあります。ローマ時代になって、ヘロデ大王が皇帝アウグストからこの町を与えられました。ヘロデ大王が死んだ後に、息子たちに分割統治が与えられましたが、この地域はヘロデ・ピリポに与えられています。そして、ヘロデ・ピリポは当時の皇帝ティベリウスに敬意を表して、名前に「カイサリア」を入れて、ピリポ・カイサリアとしました。

その時代にも、ギリシア神話に基づく異教の礼拝が行われ、それに加えて、ローマの皇帝礼拝も行われているという、どっぷりと異教の雰囲気の中で、イエス様がこの質問を弟子たちにされました。「人々は人の子をだれだと言っていますか」異教においては、礼拝は自分たちのための手段



とされます。自分たちの欲を満たすため、あるいは、目的を達成するために使われるものです。けれども、まことの神は絶えず、「わたしが誰であるかを知りなさい」という問いかけをされます。それで、イエスが誰なのか？という問いかけは、もっと大事な質問です。

14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人たちも、エリヤだと言う人たちもいます。またほかの人たちはエレミヤだとか、預言者の一人だとか言っています。」

弟子たちは、自分たち以外の人々のことなので、答えやすかったと思います。イエス様は、力強い働きをされました。それはみな、天の御国、神の国を現しているものでした。そこで、おそらく最も多かったのは、「バプテスマのヨハネ」というものでしょう。彼とほぼ同じ内容の宣教の言葉を持っておられました。そして、彼はヘロデ・アンティパスによって殺されましたが、イエス様は生きておられます。ヘロデ自身が、ヨハネの甦りだと思って恐れていたのです。そして、「エリヤ」もいます。イスラエルが一気に、背教に向っていた時に、待ったをかけたのはエリヤでありました。そして彼の預言の働きによって、バアルではなくヤハウエこそが神であると悟ったイスラエル人が多く出てきました。同じような悔い改めの働きを、主ご自身が来られる前に来るというのが、マラキが預言したことです。終わりの日には、主の到来の前にエリヤが到来します。

そして、エレミヤという人までいました。エレミヤも同じく、背教へ突っ走っているユダの国に、主に立ち返れと預言した人です。涙を流しながら預言していました。イエス様も最後に、エルサレムを見ながら涙を流されますが、イエス様の姿を見て、エレミヤを思い出すことができたのでしょうか。そして旧約聖書の正典には入っていませんが、外典と呼ばれているものにマカバイ記があります。第二マカバイ記に、エレミヤがエジプトに隠した契約の箱を、メシアが来られる前にエルサレムに持ってくる、ということが書かれています(2:5-7)。それから、「預言者の一人」という人もいました。これはモーセのような預言者です。イスラエルが民族として立て上げられ、約束の地に導いた偉大な預言者であり、彼のような預言者がもう一人現れることを、モーセ自身が預言しました(申命18:15)。

15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

ここでイエス様は、「あなたがたは」というところを強調されています。ここまでイエス様に付いてきた弟子たちがどこまで、イエスのことを誰だと思っているのでしょうか？弟子たちは、初期の頃からこの方がメシアであるかもしれない、そしてこの方は主であるとして、ユダヤ教のラビ以上の存在として従って来ました。けれども、ユダヤ人たちが一般に抱いていたメシアの姿とは必ずしも合致していませんでした。そして、権威者であるパリサイ派やサドカイ派の指導者は、イエスは偽物だと断じます。それでも彼らは従って来ました。彼らに対して、イエス様も数々の奇蹟をお見せになり、例えば水の上を歩かれ、舟に乗られたら風が吹かなくなった時には、「神の子」としてイエス

様のことをあがめたのです。それでも、いろいろな人がいろんなことを言います。しかし、あなたはイエスを誰だと思って付いてきているのか？という問いです。

16 シモン・ペテロが答えた。「あなたは生ける神の子キリストです。」

この短い一言に、ものすごい意味が含まれています。ペテロの言葉は、英語ですと the に値する言葉が各言葉に入っています。「あなたこそが、まさに生ける方で、神である方です。そして神の子ご自身であられ、そうメシアであります。」みたいなニュアンスです。

生きている方、神について、偶像のような神々ではなく、あなたは生きておられる方で、あなたこそが神ですという告白は、旧約聖書の中に数多くあります。例えばメディアの王ダリヨスは、獅子の穴に投げ込まれたダニエルに対して、こう呼びかけました。「生ける神のしもべダニエルよ。おまえがいつも仕えている神は、おまえを獅子から救うことができたか。(6:20)」異教徒にとっては目に見える形で、神が生きているかどうかは大きな動機付けになります。私たちキリスト者が、行っていることにどれだけ信仰が見えているのか？は、いつも問われていることですね。

そして、神の御子というのはどういうニュアンスなのでしょう？天地万物を造られた方は唯一であられるが、その唯一の神に子がおられるという考えです。旧約聖書のいろいろなところに出てきます。「箴 30:4 だれが天に上り、また降りて来たのか。だれが風を両手のひらに集めたのか。だれが水を衣のうちに包んだのか。だれが地のすべての限界を堅く定めたのか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。」天地を造られた方はその子を持っていながら、なおのこと神であられます。そして、神が世界に対してご自分の子をお示しになるのは、復活であることを教えておられます。詩篇 2 篇 7 節に、「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」という言葉がありますが、これは使徒 13 章のパウロの説教によると復活であることが分かります(33 節)。

そして、「キリスト」です。ヘブル語ではメシアです。イエス様が来られた時代、多くのメシア待望、終末待望が起こっていました。ローマ時代の圧政が続き、いやそれ以前からずっと、長いこと異邦人による支配が続き、人々は救いを熱望していました。旧約聖書では、アダムが罪を犯した直後から、女の子孫が蛇の子孫の頭を砕くというところから、神の贖いの約束が書かれていて、それから神の贖いを成し遂げる方が来られて万物を回復させる約束が何百回となく、いやそれ以上に与えられていました。そして、「油注がれた方」というのがその贖い主の呼び名となったのです。先ほど引用した詩篇第二篇にも、御子が油注がれた方として、メシアとして出てきますし、ダニエルの七十週の預言にも、油注がれた方が断たれるという形でメシアの名が出てきます。

17 すると、イエスは彼に答えられた。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに

明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。

「バルヨナ」というのは、ヨナの子という意味ですが、父の名、あるいは父祖の名を入れてペテロの元々の名を入れてイエス様が呼ばれていますが、彼個人にしっかりとこの幸いの言葉を宣言したいと思われたのでしょうか。「幸いです」という言葉を。イエス様はここで彼個人に適用されています。13章において、天の御国の奥義の喩えを語られていた時に、弟子たちに語られていたイエス様の思いと似ています。「しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。(16節)」イエス様は、そばに置いていた弟子たちにご自分のことを知ってもらいたいということが、もっと大きな願いであり、今、その願いがかなえられました。

そして、「このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。」とイエス様は言われます。すごく直情的なペテロで、何をすることもせっかちですが、時にすごい信仰的なことを言ったり、行ったりします。水の上をイエス様が歩かれた時に、「私に命じて、水の上を歩いてあなたのところに行かせてください。(14:28)」と言いました。けれども、イエス様はいつも、こうしたことが言えたり、行ったりすることができるのは、天の父がそうしてくださったからであることを知っておられました。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵のある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。(11:25)」

ペテロとしては、自分が何気なく発した言葉が、まさか天の父からの啓示であるとは思わなかったでしょう。そうです、これがしばしば神がなされることです。御霊の賜物には、知識の言葉や預言があります。神から与えられた超自然的な知識があります。それを言葉に出すと預言になりますが、あまりにも自然に与えられるので、まさか超自然であることに気づきません。とかく何か恍惚状態か何かにならないと、神からのものではないと思込んでしまいますが、主がなされることは「自然の中に超自然」ということが多いのです。

## 2B 教会に与えられた権威 18-20

18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。

イエス様は、ペテロがはっきりと信仰告白をしたので、それに応じてご自身もペテロに宣言されます。まずは、新しい名を与えられました。聖書には、例えばヤコブが新しい名としてイスラエルと与えられましたが、そのようにして新しい名を下さっています。それがペテロですが、元々のギリシア語ではペトロスです。「石」という意味ですが、小さめの石のことを指します。そして、イエス様は掛け言葉を使われています。旧約聖書では、ヘブル語で掛け言葉が多いですが、名前が与えられたその理由を話しますが、それと同じようにされています。「この岩」と言われています。これがギリシア語で「ペトラ」です。ですから、同じ言葉を使っているようで、少しだけ変えられています。彼



の名はペトロスですが、イエス様が教会を建てられるのはペトラの上とされています。

ペトラは、「岩」のことですが、断崖絶壁のような崖も岩に含まれます。ピリポ・カイサリアがヘルモン山の麓だということをお話しましたが、パンという神が祭られているところは、崖の下のところから湧き出ている泉を祭っています。ですから、イエス様は全く別のことを語られていました、ペテロのことは、そこら辺にある小石で、けれども教会を建てるのはその崖のような岩なのです。ペテロの上に建てられるのではなく、ペテロが告白したイエス・キリストご自身の上に教会が建てられます。この方こそが岩なる方であり、聖書の預言には神が岩として描かれており、どんなことがあっても決して動じない、いつまでも変わらない方として、救い主として岩や巖として表現されています。

したがって、教会とは何か？何をもって教会なのか？ということ定義したいと思います。「教会」という言葉が福音書では実はマタイのみで、しかも二箇所しか出てこないのですが、エクレスシアと言うギリシア語で、「集会」という意味です。集まる所ですから、いろいろな集まりとしてギリシア・ローマ社会ではエクレスシアを使いました。けれども、「わたしの集まり」なのだとして今、呼ばれているのです。教会とは何か？それは、「イエスが主であり、キリストです」ということを告白するために集まる所です。私たちは、「イエスが主」であると口で言い表すことによって、それで救われることをローマ 10 章から教わっています。パウロはテモテに対して、「神の家とは、真理の柱と土台である、生ける神の教会のことです。」と言って、キリストがどのような方かを告白する信条となっている文を載せています(1テモテ 3:15-16)。

そして、改めて「わたしの教会」と書かれていることに注目したいと思います。イエス様が建て、イエス様の教会を建てられます。私たちはその各部分であります。飽くまでもイエス様が建てられるもので、イエス様の所有物です。これは、「カルバリーチャペルの特徴」であり、イエス様が行われることに、聖霊によって私たちが従うのみであります。私たちが何か介在して、行おうとする余地は全くありません。人間的には、自分で何かをしようということはあまりにも当たり前であります。私たちは徹底的にキリストに服するものであり、この方がなされることに自分の身を任せることこそが、私たちの務めです。

そして、「よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」と言われます。前の版の新改訳ですと「ハデスの門」と訳されていました。死んだ者たちが下っていく所です。そのパンの神が祭られているところは、地獄の門と言われていたそうですが、イエス様は教会がそんな力に対しても高らかに打ち勝つことを宣言しておられます。また、これは、教会の者たちに対して人々が迫害し、たとえ死に至らしめても、それでも打ち勝つことができるということです。使徒たちの殉教を始め、教会は数多くの迫害と殉教を経てきました。初代教会の教父にテルトリアヌスという人がいますが、彼は、「殉教者の血は教会の種子である」と言いました。

19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつな  
がれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」

イエス様はこれまで、天の御国の福音を宣べ伝えていました。天の御国の宣言が山上の垂訓で  
あり、そして奥義については喩えで語られました。それを、教会の指導者となるペテロに鍵を与え  
るとイエス様は言われるのです。事実、使徒の働きを見ますとペテロが、御国の広がりが起こる時  
に鍵として用いられていることが分かります。初めに聖霊が下った時に、立ち上がって説教し、悔  
い改めたユダヤ人にバプテスマを受けるように勧めたのはペテロでした。ここで教会が誕生しまし  
た。そして、サマリヤ人に福音がピリポによって伝えられた時に、エルサレムからペテロとヨハネが  
遣わされて、信じた者たちに手を置いて祈ったら、聖霊が与えられました。そして、異邦人に対し  
ては、主がペテロに幻を見せて、コルネリオのところに行くように命じて、それで彼とその一家も聖霊  
のバプテスマを受けました。そして水のバプテスマも受けたのです。

そしてペテロに対して、また 18 章 18 節には教会の人々全てに対して、「地上でつなぐことは天  
においてもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます」という約束が与えられ  
ています。これは元々は、裁判で有罪にする無罪にするという意味であり、また法律を作る時に禁  
止すること、許可を与えることを意味していました。これを霊的に援用しておられます。つまり、私  
たちが霊的にここで言うことは、天の御国の権威の現れなのだということです。ここで、神の言葉  
に基づいて罪の赦しを宣言するならば、その人は天においても罪の赦しが与えられます(ヨハネ  
20:23)。そして私たちが共に祈る時に、天の父がそれを聞いてくださるということです。

20 そのときイエスは弟子たちに、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と命  
じられた。

イエス様は、ただでさえ、政治的に、物理的に、そして宗教的に圧力を受けておられました。ほん  
の少しでも軸がずれたら、イエス様がキリストであるという言葉は全く別の意味をもって彼らの中  
に伝わってしまいます。ヨハネによる福音書には、「わたしの時」と言われて、ご自身がキリストで  
あることを公に現す時を意識しておられました。それは、エルサレムにろばの子に乗られて入城さ  
れる時です。それが聖書に書かれている事であり、イエス様はキリストが聖書に書かれていること  
のキリストとしてご自分を人々に示さないといけなかったのです。

### **3A 自分を捨てる道 21-28**

#### **1B 人の思い 21-23**

21 そのときからイエスは、ご自分がエルサレムに行って、長老たち、祭司長たち、律法学者たち  
から多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し  
始められた。

イエス様は、弟子たちにはっきりと、ご自身がキリストであり、神の御子であることを示された上で、キリストの使命を語り始められました。これこそが、ユダヤ人には到底受け付けられないものです。「長老たち、祭司長たち、律法学者たち」と言われていますが、三つのユダヤ人の指導者たちのことを話しています。長老たちは、ユダヤ人社会の全般における指導者のことです。祭司長たちは、神殿についての権限を持っています。そして律法学者は、律法、聖書における権威者です。彼らに拒まれるということです。それだけではなく、「殺され」という言葉を聞いた時、ユダヤ人である弟子たちはすぐに、ローマの十字架刑のことを意味していると感じたことでしょう。当時、ユダヤ人には死刑の権限はなく、ローマが死刑を執行したからです。

けれども大事なのは、最後の部分「三日目によみがえらなければならないこと」であります。これこそが、この方が神の御子であることを公にすることなのですが、そのためには死ななければいけません。最も大きな徴が起こるためには、初めに彼らが期待し、希望していたものすべてが、粉々に崩れなければいけません。彼らの期待する救いは全く達成されず、死んでしわなといけなかった。けれども、全く異なる次元、新しく高い次元において、とてつもない権威が与えられます。「死者の中からの甦り」というところに救いの力です。

22 すると、ペテロはイエスをわきにお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」23 しかし、イエスは振り向いてペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

ペテロは、高ぶりました。イエス様が、「あなたは幸いです」と宣言し、そして天の御国の鍵が与えられているという話までされました。けれども、イエス様が死ななければいけないと言われた時に、この方が主であること忘れ、まるで自分自身が全ての状況を指揮しているかのごとく、イエス様を脇にお連れして、諫め始めています。ペテロは、イエス様が天の父からの啓示だという言葉をおぼれたのです。すべてのことは、神の恵みによって与えられています、賜物なのです。それは受けるに値しないものなのです、それをまるで自分が所有しているか何かのように錯覚して、それに基づいて動く、ペテロのようになってしまいます。

「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」とペテロは言いました。そうです、こんなことは起こっていいはずはありません。誰もが思う感情であり、感覚です。だからこそ、危険なのです。私たちが自分の思うこと、感じることを優先させ、それが正しいと思いつく時に危険がきます。聖書は、善意が必ずしも天の道に通じているとは教えていません。徹底的に、人は罪深く、良いと思ってしまうことさえ、まるで汚れた布のようだと言っています。人間が墮落しているという認識があるからこそ、たとえ正しいと感じ、思っていることも、主の前にその主張を下ろすことができます。

イエス様は、「下がれ、サタン。」と言われました。ペテロが、先ほど、あなたは生ける神の御子キリストですと言った時に、それが天の父からの啓示だということを感じていなかったように、ペテロもそれがサタンからの思いで、それを代弁してしまったことに気づいていません。この言葉をイエス様が言われた時はいつでしょうか？そう、サタンがイエス様を誘惑した時です。その時に、サタンはこの世の全ての王国とその栄華を見せて、「もしひれ伏して拝むなら、これをすべてあげよう。(4:9)」と言った時に、イエス様が「下がれ、サタン」と言われたのでした。ペテロは、そんなことまで思っていなかったと思います。けれども、イエス様は十字架に行くことによって、初めて世界のすべての王国を贖い、神のものにすることができることを知っておられました。十字架を経ないで良いと思われることを考えても、それは神の栄光になるどころか、サタンの思いなのです。そして、終わりの日には、そうしたサタンのそそのかしを全て受け入れる人物が現れます。それが反キリストです。

「あなたは、わたしをつまずかせるものだ。」と言われました。ここは、直訳では「つまずきの石だ」と言われています。そう、先ほどペテロは、教会を建てる岩、ペトラになぞらえてペトロと呼ばれたばかりなのに、その同じ石がイエス様を躓かせる石となってしまったのです。

そして、その一番の原因が、先ほど言いましたように、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」ということなのです。私たちは、世に生きている限り、最善なことは人を思うことです。けれども、キリストの弟子として生きるとは、また教会として建て上げられるとは、「神のことを思う」ことなのです。それがいかに人としては、あまりにも酷いことの聞こえようとも、神を選び取ることなのです。ですから、ここが最も大きな勝負どころなのです。キリスト者は、良かれと行って行うことを行うのでは不十分です。いや、それが妨げになることも十分あるのです。良かれと思うことではなく、神が良かれとされているものを、どんなに自分がそう思わなくとも選び取ることです。

## 2B 命を救う者 24-28

24 それからイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

午前礼拝でこの部分をお話ししました。イエスの弟子になることは、このように自分のあり方を徹底的に否むことです。自分が生きようとする、その思いや感情、また自分で決めている計画などを、すべてイエス様の前で捨てることです。無くすということではありません、横に置くということです。私たちが誰かを指導者、指揮者、監督としてついて行く時に、自分に考えがあっても相手の言っていることを第一にして、それを横に置きますね。それと同じです。しかし、イエス様は、神からの方であり、神の思いは人の思いよりもはるかに高い所にあるので、その横に行くという行為が、否む、捨てるという強い選択によらなければ成り立ちません。

イエス様はさらに、「十字架を負いなさい」と言われます。今の自由と選択が与えられている社会に生きている私たちは、この意味を知ることが最も難しいでしょう。アクセサリー、飾りとして十字架を掲げていて、十字架自体は慣れていますが、ローマの十字架というもののほど、私たちの生活からかけ離れているものはありません。それは、自分が激しく抵抗し、反抗し、打倒しようとする相手が、無理やり負わせるものなのです。ローマへの反逆を二度とやらせないための、見せしめです。

父なる神の御心に従う時に、私たちのこれは絶対にやる！と決めているような意志を折り曲げて、この方の御心の中に自分を明け渡すこと、これが十字架を負うことです。使徒たちの教えはこれに集中しています。私たちキリスト者は、キリストに結ばれている者で、この方の死と甦りにつながっていると信じ、水のバプテスマを受けます。自分はキリストと共に死んでおり、十字架に付けられており、けれどもキリストを信じる信仰によって、生きるのです。信仰が成長するというのは、このように自分を御心に明け渡すことができているかどうかにかかっています。

25 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。

人には、生きたいという本能があります。それは神から与えられた生存本能で、それ自体は間違っています。それを無くせという話をイエス様がしておられるわけではありません。そうではなく、神なしに、神への信頼なしに、自分で自分を生かそうとする強い意志のことをここでは話しています。神なしに、自分で自分を救っていかうとするならば、いずれその救おうと思っている命の価値や尊厳を失ってしまいます。むしろ、自分で自分を救おうとすることをあきらめ、死んでしまってもよいとしてしまうならば、神が生きてくださり、まことの命の価値を得られるのです。

これは自分の証しですが、自分がクリスチャンになったきっかけは抑鬱でした。クリスチャンになってからもその症状はなくなりませんでした。死にたいという思いは離れませんでした。クリスチャンとして失格ではないか？とも思いました。クリスチャンになって一年ちょっと経った時に、そういった自分が本当に嫌になって、こう言いました。「主よ、私は自分で自分を直そうとするのをやめます。この惨めな自分のままでも、それで主が栄光を取られるのであればそうしてください。」すると、なんとしょか、鬱が治ってしまいました！治りたい、治そうと思っている時は治らず、あきらめて、主をこのままの私をお受け取り下さいとした時に治ったのです。

26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。

先ほどのサタンのイエス様への誘いに関わってきます。全世界を得たとしても、サタンに魂を売ったら何の意味があるでしょうか？それと同じように、全世界を得ても命を失ったら何の益もありま



せん。イエス様はここで、肉体の命を言われていると同時に、それ以上に霊的な命のことを話しておられます。全世界を得たら、自分の魂は死後に滅んでもよいとするのでしょうか？という意味です。それとも、自分がこの地上においてキリストのゆえに財産が没収されたとしても、死後にキリストにある富が永遠に与えられているとしたらどうでしょうか？どちらが、価値がありますか？ということです。

そして、命はお金に変えられない、ということわざが日本語でもあります。全ての財産を失っても、例えば地震や洪水の時に、命が助かったことを喜びますね。イエス様はそれを霊的に適用し、「そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか」と言われています。自分が永遠の命、霊的な命を失ってしまっても、それをお金でも何でも買い戻すことはできないのだよ、とされています。命を失ったら、元も子もないのであり、キリストにある命を失ったら、どんな大金を叩いても買い戻すことはできないとされています。

27 人の子は、やがて父の栄光を帯びて御使いたちとともに来ます。そしてそのときには、それぞれその行いに応じて報います。

イエス様は初めに来られた時は十字架という卑しめを受けられました。けれども、そこには神の栄光がありました。それは死んでも甦り、御父の元に行けるという希望と栄光です。イエス様がここで話しておられるのは、その天から戻って来られる時の話です。ペテロは、そんなことはあってはいけません、と言いましたが、イエス様は十字架の苦しみを経たからこそ、永遠の栄光にあずかれるのであり、その栄光と力をもってわたしは戻ってくるのだと言われます。そして、その時に必ずそれぞれの行いに応じて報われます。先からキリストの報いに目を向けなければいけないことを話してきましたが、主が戻って来られる時にその報いがあります。

28 まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、人の子が御国とともに来るのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

実は、この節は次の章、17章につながっています。ここのイエス様が来るという言葉が再臨のことを指しているのであれば、使徒たちが生きている間にそれは実現しなかったこととなります。そうではなく、聖書はすぐ前にある言葉、あるいはすぐ後にある言葉を見て、その意味を解釈します。ここでは、すぐ後にある言葉です。主が御国にある栄光の姿を、ペテロとヨハネとヤコブに高い山でお見せになるのです。